
ハローワークでの悲劇

器用貧乏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハローワークでの悲劇

【Nコード】

N7128Y

【作者名】

器用貧乏

【あらすじ】

こっという経験はしたくないものです。

「高森繁さん、高森繁さん」

ハローワーク職員から事務的な声で自分の名前を連呼された。のそつとカウンターに向かい、次回の雇用保険受給の日程及び簡単な説明を上の方で聞き流した後そそくさと建物を後にした。

今日は失業認定日。認定日とは…、簡単に言うところの日にハローワークに来なければ雇用保険の恩恵を受けることが出来ないということ。普段は早起きしない俺もこの日は埃のかぶった目覚まし時計をセットする。これで今月も生活していける…。建物を出た後、今月の安堵と来月以降の不安とが入り混じった深い息を吐いた。

家に帰るとカバンを放り投げ、服やジーンズを脱ぎ散らし部屋着に早変わり。テレビの電源とゲーム機のスイッチを入れるとコントローラーを手に取り画面を食い入るように見つめた。

一日の過ごし方は大体こんな感じ。たまにゲームが本に変わったりパソコンを触ったりしているだけで大差無し。

しかし午後7時には親父が帰ってくるのでその1時間前くらいから外出する。そして8時ぐらいに家に帰って「ただいま」と言う。こうするのは訳がありました…。

母を早くに亡くした俺は親父と兄貴と三人暮らし。6歳離れた兄はとうの昔に自立し他県に就職した。だから今は親父と二人。親父は中小企業ながら課長と言う役職にあり日々忙しそう。月に1・2度ある休日出勤もこなし信頼も篤いよう。だから、というわけでもないのだが…、会社を辞めたとさえ今日に至る。なのでいつも家でダラダラしているわけにはいかない。親父がたまに早く帰って来た時にも家にいたのでは親父に勘繰られてしまう。そういうときのために夕方に外出して夜遅くに帰ってくことで煙幕を張っている。正直バレてるかな、とも思うのだがなかなか言い出すタイミ

ングが…、なんていうのは言い訳か。

これだけなら別に何てことない、ただ外出するのが面倒なだけで毎月家に入れるお金が生活を困窮にさせる。働いていたときには月4万円家に入れていた。会社を辞めた今でもこれは続けなければいけない。見栄を張るのも大変だ。

ゲームをしていると時が過ぎるのを忘れることが出来るので暇つぶしにはもってこい。時計を見るともう午後6時、今日は外出して親父より遅く帰ってくるか。さっと着替えて家の鍵を閉める。これから2時間ばかり行く当ての無いドライブだ、駐車場に向かうと車のキーを差し込み公道へと出た。

夕暮れだった空もどつぷりと闇に包まれ、外灯やネオンが眩しいくらいに輝いている。地上が明るくなると必然的に空も明るくなり、そのせいで星が見え難くなっているそうだ。夜も更けているのに星ひとつ見えない空を見上げてそんなことを思い出した。まあそんなことどうでもいいけど。

片道1時間の折り返しドライブで時間を浪費し駐車場に戻ってきた。家の前まで来ると部屋には明かりが点いていた。どうやら親父は帰っているみたいだ。

「ただいま」

仕事帰りを装い、疲れた雰囲気醸し出す。

「おお、今日は遅かったんだな」

親父がテレビ画面から視線を外し横目で俺を見ながら話す。

「ああ少しばかり忙しくてね」

言葉少なに2階へと上がる。忙しいだなんてよくそんな嘘付けるな、なんて自嘲気味に笑いながら。

今日はもう寝よう。久しぶりに早起きしたので眠くなるのも早くなる。ベッドに転がり込むと、明日は何しようかなどと考え眠りに付いた。

朝。今日もハローワークに行こう、もちろん職を探しに。そう決めたあと勢いよく布団を捲った。

1階へ降りるとキッチンへ向かいコーヒーをカップに注ぐ。流し台には親父が朝食に使用したのであろう茶碗が置いてあった。家には俺以外人の気配は無い、当然ながら親父は仕事に行った後なのだろう。

ハローワークに行くときはなるべく自転車を使う。というのも車では駐車場代がかかるのだ。なるべく無用の出費は控えたいと思いがペダルを漕ぐ原動力になっている。

ハローワーク専用の求人パソコン画面をタッチパネルで操作し好みの職種を探す。が、不況真っ只中の現在、なかなか希望通りにはいかない。書類選考は落ちて当たり前、面接にこぎつけるだけでも精一杯なのだ。

画面操作を止め深いため息と共に帰り支度をする。今日は面接できそうな所が無かった。このまま帰っても何もすることが無いので総合案内横にある求人票やパンフレットなどを取り、待ち合い椅子に座り何の気なしに目を通す。

しばらくすると瞬く間にひとがこった返し、100以上ある椅子もすぐに埋まってしまった。

「今日はいやに込んでるな」

独りごとと言ったあと隣に座っているおじさんの持ち物に目をやった。そこには雇用保険の受給方法の資料が見て取れた。

「そうか。今日も認定日なんだな」

謎が解けてニヤリと笑う。と同時にこれだけの人が失業している現実に愕然とする。

「高森さん、高森さん」

ハローワーク職員が抑揚の無い声で呼びかける。一瞬俺が呼ばれたのかと思い立ち上がって左右を確認したが、どうやら別人らしく

初老の男性が職員と話し込んでいる。脱力してドカツと音を立てて座った。

紛らわしいことしやがって。軽く舌打ちした後、もう帰ろうとパンフレットをカバンに込んで立ち上がる。丁度さっきの男性と職員の話も終わったようだ。男性は職員に軽く会釈をするとクルツと振り向き俺と目が合う…。

「お、親父…」

にわかに鼓動が速くなった。それは俺が失業したことがバレたということよりもっと衝撃的な事実。親父が手にしているのは俺にとって馴染みの深い、付き合いの長い雇用保険受給の資料…。

「繁。お、お前もか…」

一瞬にしてこの世から色彩が失われ、時間が止まったように感じた。

了
>

<

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7128y/>

ハローワークでの悲劇

2011年11月21日12時12分発行